

甲南大学 博士学位論文

卒業期女子学生に対する学生相談の寄与に関する研究

甲南大学大学院  
人文科学研究科

野原一徳

2023年9月

補記

(相談事例を扱う章における個人情報保護の理由から、要約版である)

## 論文の目次

<b>1 序論</b>	1
1.1 研究の背景	1
1.1.1 学生相談	1
1.1.2 学生生活サイクルにおける卒業期	5
1.1.3 女子青年の親子関係	11
1.1.4 青年期の心理的自立とアイデンティティ形成過程における 対人関係	18
1.2 研究の目的	22
1.3 研究の方法	23
1.4 用語の定義	24
1.4.1 卒業期と学生生活の終わり	24
1.4.2 女子学生と女子大学生	25
1.4.3 両親と親	25
1.4.4 自立と自律	26
1.5 論文の構成	26
<b>2 研究 1「学生相談における卒業期の意味：文献研究」</b>	29
2.1 問題と目的	29
2.2 文献資料の抽出と引用関係	30
2.2.1 文献資料の抽出	30
2.2.2 資料間の引用関係	31
2.3 論文内容の分類と検討	32
2.3.1 卒業期の社会的文脈や学生相談という対人関係の場の性質	32
2.3.2 卒業期の学生への具体的援助	35
2.3.3 卒業期の学生自身の発達	37
2.4 まとめと残された課題	40

<b>3 研究 2「大学生の父親とのコミュニケーションおよび父親への 視点取得による就職イメージへの影響」</b> .....	42
3.1 問題と目的	42
3.1.1 青年の父親とのコミュニケーション	42
3.1.2 青年期における父親との関係性の発達	43
3.1.3 視点取得と親子関係	44
3.1.4 就職イメージと父親との関係	45
3.1.5 目的	46
3.2 方法	46
3.2.1 調査の手続き	46
3.2.2 質問フォーム	47
3.3 結果	48
3.3.1 因子構造の決定および基礎的な分析	48
3.3.2 父親との交流の男女差	53
3.3.3 父親との交流の学年差	53
3.3.4 父親とのコミュニケーションによる父親への視点取得への 影響	54
3.3.5 父親との交流の類型化	55
3.3.6 父親との交流の類型による就職イメージへの影響	57
3.4 考察	58
3.4.1 父親との交流の男女差	59
3.4.2 父親との交流の学年差	59
3.4.3 父親とのコミュニケーションによる父親への視点取得への 影響	60
3.4.4 父親との交流の類型による就職イメージへの影響	60
3.4.5 本研究の限界と残された課題	61
<b>4 研究 3「卒業期の女子大学院生における父親像と殻表象」</b> .....	62
4.1 問題と目的	62

4.2 事例 A	63
4.2.1 事例 A の面接初期の概要	63
4.2.2 事例 A の経過	64
4.3 考察	70
4.3.1 語れなさ と 孤独	70
4.3.2 卒業期 と 父親像	71
4.3.3 見守られ、助けられながら探索すること：殻について	73
4.4 まとめと残された課題	74

## 5 研究 4「卒業期女子大学生における親子関係の変容：心理的自立と保護をめぐる」……………76

5.1 問題と目的	76
5.2 事例 B	77
5.2.1 事例 B の面接初期の概要	77
5.2.2 事例 B の経過	78
5.3 事例 C	80
5.3.1 事例 C の面接初期の概要	80
5.3.2 事例 C の経過	81
5.4 考察	84
5.4.1 心理的自立と保護をめぐる葛藤：両親との心理的距離	84
5.4.2 父親および母親との関係の変化：父親の「わからなさ」	84
5.4.3 心理的殻としての衣服表象	87
5.5 まとめと残された課題	88

## 6 研究 5「大学生活の終わりににおける心理的自立とまなざしの移動」……………89

6.1 問題と目的	89
6.2 事例 D	90
6.2.1 事例 D の面接初期の概要	90
6.2.2 事例 D の経過	91

6.3 考察	96
6.3.1 大学生活の終わりと心理的自立	96
6.3.2 「見栄」をめぐる面接関係	98
6.3.3 心理的殻とまなざしの移動	99
6.4 まとめと残された課題	101
<b>7 総括</b>	<b>102</b>
7.1 各研究のまとめ	102
7.1.1 第2章(研究1)のまとめ	102
7.1.2 第3章(研究2)のまとめ	102
7.1.3 第4章(研究3)のまとめ	103
7.1.4 第5章(研究4)のまとめ	104
7.1.5 第6章(研究5)のまとめ	104
7.2 研究の理論的、実践的含意	105
7.2.1 学生相談から見た卒業期の意味	105
7.2.2 親子関係における対人関係および対象関係の変容	107
7.2.3 学生自身の体験様式の検討	111
7.2.4 学生相談への示唆	114
7.3 本論文の限界と今後の課題	117
<b>文献</b>	<b>120</b>
<b>初出一覧</b>	<b>136</b>
<b>謝辞</b>	<b>137</b>
<b>付録</b>	<b>138</b>
「父親(役割を担う人)との関係性による就職イメージへの影響に ついての調査」質問紙	138

## 第1章「序論」

学生相談は学生の心理社会的発達を支援する臨床実践であり、支援は学生の学生生活に沿うなかで行われる。学生相談の臨床実践から理論化された概念として、「学生生活サイクル」(鶴田, 2001a など)が挙げられる。「学生生活サイクル」とは、入学から卒業までの学生の心理発達を理解する視点である。その時期区分としての卒業期は、大学から社会への移行が大きな主題となる。卒業期の学生相談においては、父親に関する話題が多いという指摘も見られる。

次に、既存の研究において、女子青年と母親との関係性は、父親とのそれと比較して、親密さを維持しながら発達すると考えられている。両親との関係性の時間的変化は、男女ともに青年期前期に否定的なイメージを抱くものの、徐々に肯定的になるとおおよそまとめられる。なお女子青年において父親は何を考えているのかわからないという認識を持つことに言及した研究が存在する(厚澤ら, 2020; 野口・市川, 2018)。

また、心理的自立は、親との関係など重要な他者との関係性を表す概念である。心理的自立に関するひとつの傾向として、主として親からの分離的側面に焦点づけられてきたという指摘がある(平石, 2014)。分離を強調する視点は自律や个体化という個人における発達の達成をとらえようとするが(Fonagy, 2001/2008)、発達について他者とのつながりや関係性に重きを置く議論がある(Blat & Blass, 1990; Bowlby, 1969/1976, 1988/1993)。心理的自立が含まれる青年期のアイデンティティ形成においても、他者との対人関係における結びつきや関係性が役割を果たす(杉村, 1998, 1999)。

本論文の目的は、大学の卒業や大学院の修了が近づいた、卒業期の青年期女子学生の心理社会的発達を探求し、学生相談への示唆を得ることであった。具体的な研究課題として、卒業期の青年期女子学生の心理社会的発達については、学生相談から見た卒業期の意味、親子関係における学生の対人関係および対象関係の変容、そして学生自身の体験様式の検討を行うこととした。ただしこれらのなかでも議論の中心は、女子学生の家族との関係性であり、とりわけ父親との関係性であった。これらの卒業期女子学生の心理社会的発達についての議論から、最後に学生相談における支援のあり方を検討した。

本論文における研究の方法は、主に事例研究である。これにより既存の研究で明確にとらえきれなかった卒業期女子学生の心理社会的発達に関する多面的で通時的な知見を、複数の事例の蓄積から発見的に提起した。

## 第2章「学生相談における卒業期の意味：文献研究」

本章の目的は、これまで発表された学生相談の卒業期に関する事例研究を収集および抽出し、論文間の引用関係を明らかにするとともに、扱われた主題を分類することを通じて今後の課題を検討することであった。本章では主に1994年から2019年12月までの文献資料を扱った。最終的に分析対象となった論文は42本であった。

結果は、抽出された論文間において、鶴田(1994a)と鶴田(1995a)の引用が突出していた。このふたつの論文は、学術雑誌の区別なくさまざまな論文から引用されていた。引用が多い理由として、両論文によって大学生の卒業期という概念が広く認知されたことが考えられた。

続けて卒業期に関わる研究の内容を検討するため、各論文における主題を整理した。類似した主題ごとにカテゴリーをまとめて(小分類)、さらにそのカテゴリー同士の関係から上位カテゴリーを見出した(大分類)。各論文は、いずれかの小分類におさめたが、分類は相互に排他的ではなく、また論文に複数の主題が含まれる場合も多かったため、論文によっては複数のカテゴリーに分類した。

その結果、3つの大分類と、7つの小分類に整理された。大分類「卒業期の社会的文脈や学生相談という対人関係の場の性質」は、卒業期の社会的文脈やその文脈に対応した相談構造に関わる。ここには、小分類の「限られた時間という認識」と「学生の外的課題と内的課題の扱い」が含まれた。次に、大分類「卒業期学生への具体的援助」は、相談員による具体的な援助活動を主題とするものである。小分類として「学生に対する技法や態度の適用」、「卒業を見すえてつなぐ動き」、および「発達障害学生への援助」が挙げられた。最後の分類「卒業期の学生自身の発達」は、学生自身の発達に関わる主題である。小分類として「親子関係と心理的自立」と「自己の連続性/非連続性、および自他とその境界」があてはまった。

今後の課題として、卒業期学生の外的課題と内的課題の連動性の探求すること、卒業期における親子関係の主題を深めること、学生自身の自己や他者についての感覚や空想の主題を拡張することが考えられた。

## 第3章「大学生の父親とのコミュニケーションおよび父親への視点取得による就職イメージへの影響」

第2章で提起された課題として、学生自身の外的課題と内的課題の連動性を探究する

こと、および親子関係の主題を深めることが挙げられた。このような問題意識のもとで、本章の目的は、父親との交流のあり方における男女差と学年差、学生の父親との直接的および間接的コミュニケーションによる父親の立場になって認知的に想像すること(父親への視点取得)への影響、父親との交流のあり方における就職に対するイメージの影響を確認し、明らかにすることであった。

研究の方法は、大学生 458 名(男子 241 名、女子 217 名; 1 年生 192 名、2 年生 116 名、3 年生 97 名、4 年生 53 名)を対象に、ウェブ上で質問紙調査を実施した。

本研究で得られた主な知見は以下のものがあつた。父親との日常的な会話の頻度や学生に母親が父親への親密さを伝える程度について、男女差は認められなかつた。女子学生は男子学生よりも母親が父親への不満を伝える程度が多いという有意傾向は見られ、男子学生は女子学生よりも父親の立場になって想像する程度が多いという有意傾向は見られた。父親との交流のあり方について、低学年と高学年による差は認められなかつた。また、男女ともに、学生と父親との日常的な会話の多さ、そして学生に母親が父親への親密さを伝える程度が、学生が父親の立場になって想像することを予測した。父親への視点取得は、父親との日常的な会話の頻度だけでなく、母親がどのように父親を見ているかを含んでいることが確認された。加えて、父親と活発に交流する男子学生は、不活発な男子学生よりも就職に対して希望のあるイメージと、就職することは規範であるというイメージを持っており、父親と活発に交流する女子学生は、不活発な女子学生よりも就職に対して希望のあるイメージを持っていた。この結果は、青年期学生の家族内の心理的過程と就職活動とをつなげるものと考えられた。

第4章から第6章までは学生相談の実践にもとづく事例研究である。

#### **第4章「卒業期の女子大学院生における父親像と殻表象」**

本章の研究目的は、卒業期の女子大学院生の心理社会的発達を臨床的な文脈から検討することであつた。具体的には、卒業期の学生において父親が主題となる際の意味、および学校生活から社会人への移行期にある学生の心理的作業の機序を考察した。

本章では学生相談で相談面接を行った1事例が提示された。相談は、学生相談室にて週1回の頻度で、心理力動的な理解のもと行われた。期間はおよそ1年間であつた。

経過から、親子関係について親と語り合えない領域の存在は、事例の学生を孤独にし、



不安を強めることが理解された。親に対する外的な認知や理解が得られ、親に対する関心や願望を考えられるようになっていくにつれて、学生の不安は和らいだと考えられた。続いて、権威や裁く存在とは異なった陽性の父親像に関する議論を参照しつつ、父親が卒業期に主題となる意味には、学生が守られている、手助けしてくれるという関係性を確認することがあった。さらにこの主題となる意味としては、学生にとって馴染みのない父親自身が探索の対象となる点も考えられた。他には、事例において特徴的であった表象が「心理的殻」と名付けられた。心理的殻は、身体感覚をともなう、自己と他者との距離感や交渉の影響を受けている、基本的には防衛機制の産物であると考えられた。この表象の変容過程をもとに、学生自身の心理的作業の機序が考察された。心理的作業の機序には、内的現実と外的現実とを明瞭に区別しつつ、かつ柔軟な交流も可能にする自我機能との関連が考えられた。

#### **第5章「卒業期女子大学生における親子関係の変容：心理的自立と保護をめぐる」**

本章の目的は、卒業期における心理的自立の主題を検討すること、両親との三者による関係の変化を分析すること、学生の抱く表象をもとに「心理的殻」概念を明確にして概念的妥当性を吟味することであった。

本章では卒業期女子学生の2事例が提示された。2事例の学生相談面接は、どちらも週1回の頻度で、卒業までの1年程度の期間に行われた。両事例ともに大学卒業という外的な環境変化を前にして、学生の内的な空想が活性化された。

考察では、社会的立場の変化の予感のなかで、学生はより一層個人として分化したい一方で保護も受けていたいという葛藤とその調整が、主題になりうると指摘した。また、事例経過において、学生は自身の考え方の傾向や対人関係のパターンを理解するとともに、親それぞれに対して複雑な見方ができるようになり、これまで気づいていなかった側面を知覚していった。この展開から、父親が母親よりも相対的に疎遠である学生相談事例においては、学生が母親との情緒的きずなを維持しながら個別的になり、父親について柔軟に考えられるようになる場合があると考えられた。さらに母親と父親との学生との関係性は、循環的に展開するとも考察された。最後に、両事例で報告された夢のなかの衣服は、他者や外部への恐れと関連があり心理的殻としてとらえられた。この表象には多様な質感や他者との関係性が反映されていると考えられた。

#### **第6章「大学生活の終わりににおける心理的自立とまなざしの移動」**

本章の目的は、大学生活の終わりの時期における学生の心理的自立を取り上げて検討することであった。この検討にあたり、学生の心理的自立を基礎づけるものについて議論し、相談室内での面接関係と学生の外的現実との影響関係を吟味し、心理的自立をめぐる学生自身の体験と認知の分析を行った。

本章では女子学生との学生相談の1事例が提示され、事例経過にもとづき上記の論点が検討された。面接頻度は週1回であり、面接期間は卒業までの3年弱であった。

考察では、心理的自立を構成するものとして「居場所」の存在を挙げ、脅かされない居場所としての学生相談室の機能を述べた。加えて、心理的自立は学生による大学後の時間的見通しとも関連すると考えられた。次に、学生が大学生活を続けるかどうかという外的な現実に向き合ったときに、学生自身の以前からの心理的困難とも結びつくことで、学生相談での面接関係は動揺するが、面接が展開する機会ともなりえた。また、事例の経過での「心理的殻」と考えられる表象は、まなざしの移動として記述した注意の向け方の変化と連動していた。まなざしの移動は心理的自立にも関連すると考えられた。

## 第7章「総括」

本章では、各研究についてまとめを行い、研究の理論的および実践的含意について記述し、本論文の限界と今後の課題を提示した。

卒業期において、大学での学びを終え生活が変化するという予感、学生に馴染みのない世界へと踏み出す不安を喚起した。学生は卒業期に内的な切迫感を抱くとともに脅かされ、自身を脆弱なものとして感じる場合があると考えられた。この状況に対処するにあたって、学生自身の内的調整に加えて、対人関係においても調整が行われると考えられた。

親子関係に関して、検討した事例から、母親は父親よりも女子学生と親密な関係を紡いでいた。母親による父親への意識的、無意識的なとらえかたが、女子学生の父親へのとらえかたに影響を与えた。心理的自立をめぐる学生の葛藤は、父親よりも母親に対して喚起された。この心理的自立には、保護や結びつきといった関係性の調整と関連していた。事例の経過にもなると、学生の母親への知覚に変化が生まれた。それは馴染んでいる面とは異なる今まで注意を向けていなかった側面への気づきがあった。その一方で、事例における父親との関係は、疎遠で学生が相対的に馴染みのない存在であった。それはどのように父親をとらえ、付き合えばよいかわからないという感覚をともなっていた。本論文では学生が父親の権威や裁く側面とは異なるところを発見や再確認し、父親について探索することに

より馴染みのない社会人生活を考える場合があると考えられた。これらの母親と父親との関係性は、相互に影響を与えながら循環的に改訂されていくと示唆された。親との関係性の変化は、学生自身が自身の振る舞いや願望を理解することともなっていた。

学生の体験様式について、学生が社会人生活を意識するときに、心理的自立はひとつの大きな話題となった。親との情緒的なつながりのなかで見守られている感覚を持ちながら、分離していくという視点が卒業期において意義を持つと考えられた。また、相談事例によっては「心理的殻」が面接過程のなかで見出される場合があった。この心理的殻は身体感覚に根ざしており、学生の内側とその外部の感覚を反映すると考えられ、学生の対人関係によって変容する表象として提起された。

学生相談への示唆として、学生の学生生活の終了に対する見通しは、学生相談を行う面接構造と密接に関連しているため、学生生活の残りの時間について話し合うことは意義があると考えられた。学生が経験してきた固有の歴史について仮説を立てつつ、外的な課題について話し合うことも有用であった。相談員の役割として、学生の情動の受け皿となり学生を支えながら、学生の対象関係および対人関係を明確かつ複雑に考えられるように質問することが挙げられた。この探索する関係性には、相談員との面接関係も含まれた。

本論文の限界として、今回の研究は一定の心理社会的付置における事例に主にもとづくことが挙げられる。今後の課題として、多様な家族構成やさまざまな性を生きる学生との比較など、対象を広げて検討することがある。他には、心理的殻の概念的な適用範囲をめぐる課題や、学生相談の個別相談にとどまらない実践への適用をめぐる課題などがある。

## 文献

- Abelin, E. L. (1971). The role of the father in the separation-individuation process. In McDevitt, J. B. & Settlege, C. F. (Eds.). *Separation-individuation*. New York: International Universities Press, 229-252.
- Abelin, E. L. (1975). Some further observations and comments on the earliest role of the father. *International Journal of Psychoanalysis*, 56(3), 293-302.
- 赤木真弓 (2018). 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響: 母娘関係尺度の作成を通して. *発達心理学研究*, 29(3), 114-124.
- 青木万里 (2011). 卒業期の学生への森田療法的アプローチ. *日本森田療法学会雑誌*, 22(2), 99-110.
- 浅原知恵 (2005). 学生相談における「教育的・支持的関わり」の終結—卒業後に残された気がかりの外的・内的要因をめぐって. *学生相談研究*, 26(1), 13-23.
- 厚澤祐太郎・菅麻里・齋藤慈子 (2020). 青年期における父親に対する認識の変化とその過程: 大学生男女の語りの比較から. *質的心理学研究*, 19, 194-213.
- 馬場謙一 (1987). 青年期とは何か. 馬場謙一 (他編). *青年期の深層*. 有斐閣, 1-34.
- Benjamin, J. (1988). *The bonds of love*. Pantheon Books. 寺沢みずほ (訳) (1996). *愛の拘束*. 青土社.
- Blatt, S. J. & Blass, R. B. (1990). Attachment and separateness: A dialectic model of the products and processes of development throughout the life cycle. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 45(1), 107-127.
- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic Study of Child*, 22(1), 162-186.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1 Attachment*. London: Hogarth Press. 黒田実郎 (他訳) (1976). *母子関係の理論I 愛着行動*. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Clinical applications of attachment theory*. London: Routledge. 二木武 (他訳) (1993). *母と子のアタッチメント—心の安全基地*. 医歯薬出版株式会社.
- Branje, S., de Moor, E. L., Spitzer, J. & Becht, A. I. (2021). Dynamics of identity

- development in adolescence: A decade in review. *Journal of Research on Adolescence*, 31(4), 908-927.
- Campbell, C. G. & Winn, E. J. (2018). Father-daughter bonds: A comparison of adolescent daughters' relationships with resident biological fathers and stepfathers. *Family Relations*, 67(5), 675-686.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 113-126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学. 川島書店.
- 浴野雅子 (1998). 女子青年の親子関係と自立. 辻井正次 (編著). 現代青年の理解の仕方-発達臨床心理学的視点から. ナカニシヤ出版, 59-67.
- 遠藤由美 (2014). 社会的文脈から共感を考える. 梅田聡 (編). コミュニケーションの認知科学 2 共感. 岩波書店, 79-99.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1. みすず書房.
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: Norton. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton. 中島由恵 (訳) (2017). アイデンティティ:青年と危機. 新曜社.
- Etchegoyen, A. (2002). Psychoanalytic ideas about fathers. Trowell, J. & Etchegoyen, A. (Eds.) *The importance of fathers: A psychoanalytic re-evaluation*. London and New York: Brunner-Routledge, 45-66.
- Fonagy, P. (2001). *Attachment theory and psychoanalysis*. New York: Other Press. 遠藤利彦・北山修 (監訳) (2008). 愛着理論と精神分析. 誠信書房.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E., & Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization, and the development of the self*. New York: Other Press.
- Freud, S. (1900). *Die Traumdeutung*. 高橋義孝 (訳) (1968). フロイト著作集 2 夢判断. 人文書院.
- Freud, S. (1913). *Totem und Tabu*. 西田越郎 (訳) (1969). フロイト著作集 3 トーテムとタ

- ブー. 人文書院, 148-281.
- 藤井吉祥 (2008). 親子関係における若者の「自立」－質的調査による考察. *教育科学研究*, 23, 21-30.
- 藤原あやの・伊藤裕子 (2010). 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達. *カウンセリング研究*, 43(1), 33-42.
- 藤原勝紀 (1998). 学生相談の大学における位置と役割 河合隼雄・藤原勝紀 (編). *学生相談と心理臨床*. 金子書房, 11-21.
- 福田真也 (2017). 新版 大学生のこころのケア・ガイドブック－精神科と学生相談からの17章. 金剛出版.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Harvard University Press. 岩男寿美子 (監訳) (1986). もうひとつの声－男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ－. 川島書店.
- Gondoli, D. M. & Silverberg, S. B. (1997). Maternal emotional distress and diminished responsiveness: The mediating role of parenting efficacy and parental perspective taking. *Developmental Psychology*, 33(5), 861-868.
- Grayson, P. A. (1989). The college psychotherapy client. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds.). *College Psychotherapy*. New York: The Guilford Press, 8-28.
- Greenacre, P. (1966). Problems of overridealization of the analyst and of analysis: Their manifestations in the transference and countertransference relationship. *Psychoanalytic Study of Child*, 21, 193-212.
- Grotevant, H. D. & Cooper, C. R. (1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, 29(2), 82-100.
- 萩臺美紀・若島孔文 (2020). 母親による子どもの父親イメージの構成に関する研究－家族内の直接的コミュニケーションとの比較から－. *家族心理学研究*, 34(1), 40-54.
- Hartmann, H. (1950). Comments on the psychoanalytic theory of the ego. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 5, 74-96.
- 林昭仁 (1998). 学生相談に関する歴史と今後の課題. 河合隼雄・藤原勝紀 (編). *学生相談と心理臨床*. 金子書房, 22-33.
- 樋口和彦 (1981). ポスト・スチューデント時代. 笠原嘉・山田和夫 (編). *キャンパスの症*

- 候群－現代学生の不安と葛藤. 弘文堂, 253-283.
- 平石賢二 (1995). 青年期の異世代関係－相互性の視点から. 落合良行・楠見孝 (編). 講座 生涯発達心理学 4 自己への問い直し. 金子書房, 125-154.
- 平石賢二 (2014). 親子関係. 日本青年心理学会 新・青年心理学ハンドブック. 福村出版, 304-314.
- Hoffman, J.A. (1984). Psychological separation of late adolescents from their parents. *Journal of Counseling Psychology*, 31(2), 170-178.
- Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. D.Appleton-Century Company.
- 井手原千恵 (2014). 大学院卒業期の男子学生との自己の発達促進を目的とした面接過程. 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 14, 22-29.
- 池永恵美 (2012). 卒業期の課題に直面して不安が高まった女子学生との動作面接. リハビリシオン心理学研究, 38(2), 73-84.
- 池田幸恭・大竹裕子・落合良行 (2006). 「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説. 筑波大学心理学研究, 31, 45-57.
- 井ノ崎敦子 (2017). 性的被虐待経験をもつ女子学生への卒業期における学生相談の要点について: 共感的応答による怒りの受容と主体性の高まり. 学生相談研究, 38(2), 146-156.
- 井上由紀子・塩飽仁 (2007). 子どもの共感経験と親の共感経験および感情の言語化の関連. 小児保健研究, 66, 412-418.
- 石丸綾子 (2013). 女子大学生の父親への否定的感情に関する研究: 現在と中学時代の回想を比較して. 九州大学心理学研究, 14, 125-137.
- 板倉憲政 (2013). 家族内の直接的コミュニケーションと間接的コミュニケーションの関連性: 家族満足度との関連性に着目して. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62, 273-282.
- 岩渕将士・加藤道代 (2020). 大学生の入学から卒業にかけての心理社会的な特徴－学生生活サイクルとの比較から－. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 69(1), 79-98.
- 岩上真珠 (2014a). 多様化する家族のかたち. 宮本みち子・岩上真珠 (編). リスク社会のライフデザイン－変わりゆく家族をみすえて－. 放送大学教育振興会, 48-62.

- 岩上真珠 (2014b). ライフコースを知ろう. 岩上真珠・大槻奈巳 (編). 大学生のためのキャリアデザイン入門. 有斐閣, 1-17.
- 岩田淳子 (2003). 高機能広汎性発達障害の大学生に対する相談について. 学生相談研究, 23(3), 243-252.
- 岩田淳子 (2020). 特別なニーズのある学生の支援: 1.障害のある学生. 新版 学生相談ハンドブック. 学苑社, 10-12.104-110.
- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 上地雄一郎 (1992). 父親コンプレクスからみた神経症男子学生の問題. 学生相談研究, 13(1), 9-17.
- 神谷ゆかり (1997). 自立の概念規定について—“autonomy”の視点を中心に—. 安田女子大学紀要, 25, 105-113.
- 軽部雄輝・佐藤純・杉江征 (2014). 大学生の就職活動維持過程モデルの検討: 不採用経験に着目して. 筑波大学心理学研究, 48, 71-85.
- 軽部雄輝・田中佑樹・川崎由貴・村田美樹・永作稔・島田洋徳 (2018). 大学生の就職活動の遂行に影響を与える不安の機能的側面に関する検討. 早稲田大学臨床心理学研究, 18(1), 19-27.
- 春日由美 (2000). 日本における父娘関係研究の展望: 娘にとっての父親. 九州大学心理学研究, 1, 157-171.
- 春日由美 (2005). 女性にとっての父娘関係に関する一研究: 二つの父娘関係尺度作成と面接調査による質的検討. 心理臨床学研究, 23(5), 597-603.
- 春日由美 (2007). 女性の自己受容と父娘関係に関する一研究. 健康支援, 9 (1), 1-9.
- 勝見吉彰 (1997). 卒業期来談学生に関する臨床心理学的考察. 広島女子大学生生活科学部紀要, 3, 285-294.
- 葛城浩一 (2011). 日本における学生支援活動の歴史的変遷. 加野芳正・葛城浩一 (編). 学生による学生支援活動の現状と課題. 高等教育研究叢書, 112, 17-33.
- 河合隼雄 (1976). 母性社会日本の病理. 中央公論社.
- 木川智美 (2016). 女子大学生における親への愛着がキャリア発達におよぼす影響. パーソナリティ研究, 25(1), 89-92.
- 菊地寿奈美 (2015). 発達障がいを伴う卒業期の大学生に対する支援実践: “サポートブ



- ック”作成を通して. 立命館文學, 641, 495-479.
- Kil, H. & Grusec, J. H. (2020). Links among mothers' dispositional mindfulness, stress, perspective-taking, and mother-child interactions. *Mindfulness*, 11(7), 1710-1722
- 吉良安之・田中建夫・福留留美 (2007). 学生相談来談者の学年ごとの問題内容と学生期の諸課題. 学生相談研究, 28(1), 1-13.
- 北見由奈・茂木俊彦・森和代 (2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究. 学校メンタルヘルス, 12(1), 43-50.
- 小島真紀子・今野歩 (2012). 青年期女子における父親役割の認識. 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, 289.
- 今野歩 (2017). 青年における父親像の類型化とその特徴. 家族心理学研究, 31(1), 56-68.
- 河野恭子 (1998). 学生相談における「橋渡し」機能について—ある男子学生との面接過程を通して. 学生相談研究, 19(2), 135-140.
- 小高恵 (2008). 青年の親への態度についての発達的变化: 心理的離乳過程のモデルの提案. 太成学院大学紀要, 10, 31-48.
- 小谷英文・平木典子・村山正治 (編) (1994). 学生相談—理念・実践・理論化—. 星和書店, 3-17.
- 高坂康雅 (2018). 大学生における心理的自立と経済的自立・社会観との関連. 和光大学現代人間学部紀要, 11, 123-134.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2003). 青年期における心理的自立 (I). 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 4, 135-144.
- 厚生労働省 (2020). 令和2年度版 厚生労働白書.
- 孤塚貴博 (2011). 青年期における家族構造と家族コミュニケーションに関する研究: 青年の認知する家族内ストレスからの検討. 家族心理学研究, 25(1), 30-44
- Lemma, A. (2005). The many faces of lying. *International Journal of Psychoanalysis*, 86(3), 737-753.
- Lewin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: Haper Collins Publishers,
- 猪股佐登留 (訳) (2017). 社会科学における場の理論. ちとせプレス.
- Loewald, H. W. (1960). On the therapeutic action of psycho-analysis. *International Journal of Psychoanalysis*, 41, 16-33.

- Long, E. C. J. (1990). Measuring dyadic perspective-taking: Two scales for assessing perspective-taking in Marriage and Similar Dyads. *Educational and Psychological Measurement*, 50, 91-103.
- Long, E. C. J. (1993). Perspective taking differences between high and low adjustment marriage: Implications for those in intervention. *The American Journal of Family Therapy*, 21(3), 248-259.
- Lundell, L. J., Grusec, J. E., McShane, K. E., & Davidov, M. (2008). Mother-adolescent conflict: adolescent goals, maternal perspective-taking, and conflict intensity. *Journal of Research on Adolescence*, 18(3), 555-571.
- 前田泰伸 (2019). 働く女性の現状と課題—女性活躍の推進の視点から考える—. *経済のプリズム*, 181, 21-44.
- Mahler, M. S. (1963). Thoughts about development and individuation. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 18(1), 307-327.
- Mahler, M. S., Pine, F. & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) (2001). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化. 黎明書房.
- 牧野カツコ・渡辺秀樹・舩橋恵子・中野洋恵 (編著) (2010). 国際比較にみる世界の家族と子育て. ミネルヴァ書房.
- Margolis, G. (1989). Developmental opportunities. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds.). *College psychotherapy*. New York: The Guilford Press, 71-91.
- 増淵裕子 (2019). 大学生における就職活動を通しての自己成長に関する研究の動向. *学苑*. 940. 55-61.
- 松田英子・日浅美由紀・鈴木秀生・高澤則美 (2011). 学生相談室における学生支援に関する事例報告—教職員, 保護者, 医療機関との連携を行った 4 事例より—. *情報と社会*, 21, 103-112.
- 松田侑子・永作稔・新井邦二郎 (2010). 大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響—コーピングに注目して—. *心理学研究*, 80(6). 512-519.
- 松瀬留美子 (2015). 自分の中の複数の人格を語る青年期女性と解離. *学生相談研究*, 36 (2), 85-96.
- Medalie, J. D. (1981). The college years as a mini-life cycle: Developmental talks and

- adaptive options. *Journal of the American College Health Association*, 30, 75-79.
- 三谷洋美 (2008). 卒業期に「表現する」ことの意味－自傷行為に悩んだ援助職専門学校の学生の学生相談事例. *心理臨床学研究*, 26(3), 279-289.
- 宮本みち子 (2004). ポスト青年期と親子戦略－大人になる意味と形の変容. 勁草書房.
- 水本深喜 (2009). 青年期から成人期への移行期の親子関係－特に母娘関係に焦点を当てた研究の展望. *青山心理学研究*, 9, 71-82.
- 水本深喜 (2016). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響 : 「母親への親密性尺度」による検討. *青年心理学研究*, 27 (2), 103-118.
- 水本深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係－精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差－. *教育心理学研究*, 66(2), 111-126.
- 水本深喜・高田治樹・正木澄江・池上真平 (2016). 両親との関係が大学生のキャリア発達に与える影響の性差(1). *日本教育心理学会発表論文集*, 58, 482.
- 水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味: 精神的自立・精神的適応との関連性から. *発達心理学研究*, 21(3), 254-265.
- 水谷友吏子 (2007). 否定的母親像にとらわれていた女子学生が示した自立の意味－娘から成熟した女性への変容過程－. *学生相談研究*, 27(3), 216-226.
- 文部科学省 (2021a). 令和3年度 学校基本調査.
- 文部科学省 (2021b). 令和2年度 家庭教育の総合的推進に関する調査研究－家庭教育支援の充実に向けた保護者の意識に関する実態把握調査－.
- 文部科学省中央教育審議会 (2011). 今後の教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申).
- 文部省高等教育局 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告): 学生の立場に立った大学づくりを目指して.
- 森さち子 (1997). 学生相談における心理療法の時間的構造: 内向きか外向きかの葛藤と休暇・卒業体験. *精神分析研究*, 41(4), 301-303.
- 森さち子 (1999). 学生相談における心理療法の時間的構造 (その2) : 卒業体験の中で共存可能になった内向きと外向きの自分. *精神分析研究*, 43(5), 545-555.
- 毛利真紀 (2019). 自閉スペクトラム症を持つ学生の卒業期の葛藤と感情共有的支援を通じた変容. *学生相談研究*, 40(1), 1-11.

- Muir, R. (1989). Fatherhood from the perspective of object relations theory and relational systems theory. In Cath, S. H., Gurwitt, A. & Gunsberg, L. (eds). *Fathers and their families*, Hillsdale, N.J.: The Analytic Press, 66-75.
- 妙木浩之 (1997). 父親崩壊. 新書館.
- 内閣府 (2005). 青少年の社会的自立に関する意識調査.
- 内閣府 (2021). 令和3年版 男女共同参画白書.
- 中島暢美 (2009). 高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動--アスペルガー障害の学生の就職活動と卒業について. 神戸山手大学紀要, 11, 157-173.
- 中西新太郎 (2007). 自立支援とは何か-新自由主義社会政策と自立像・人間像. 後藤道夫・竹内章郎・中西新太郎・渡辺憲正・吉崎祥司. 格差社会とたたかう(努力・チャンス・自立)論批判-. 青木書店, 177-216.
- 中谷陽輔・浦田悠・谷伊織・渥美純子・田中道弘・三保紀裕・大西将史・亀田研・榎本博明・福井斉・並川努 (2010). 生涯発達における自己の諸相 (12) :アイデンティティ・スタイルと大学への進学理由・就職イメージの関連性. 日本心理学会大会発表論文集, 74, 1PM107.
- 中妻拓也・サトウタツヤ (2012). 共感性尺度の得点と共感対象選択の関連. 日本心理学会第76回大会発表論文集, 3AMB21.
- 鳴澤實 (編著) (1986). 学生・生徒相談入門-学校カウンセラーの手引とその実際-. 川島書店.
- Newman, B. M. & Newman, P. R. (1984). *Development through life: A psychosocial approach*. 福富護(訳) (1988). 生涯発達心理学 : エリクソンによる人間の一生とその可能性. 川島書店.
- Nielsen, L. (2007). College daughters' relationships with their fathers: A 15 year study. *College Student Journal*, 41(1), 112-121.
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について:「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」.
- 日本学生相談学会 (2013). 学生相談機関ガイドライン.
- 西口夫巳枝・伊藤高廣 (2004). 高機能自閉症の学生への卒業までの援助の試み-学生相談室の立場から・指導教員の立場から-. 学生相談研究, 25(2), 107-115.
- 野口康彦 (2009). 父親の自殺を経験した統合失調症の女子学生の卒業期における心

- 理過程の一考察. 学生相談研究, 29(3), 218-227.
- 野口康彦・市川美樹 (2018). 女子大学生の精神的自立と父娘関係: 父親の再評価という視点から. 茨城大学人文社会科学部紀要 人文コミュニケーション学論集, 3, 27-49.
- 野原一徳 (2015). 学生相談における学内外との連携と情報共有の可能性: 宣言的知識と手続き的知識という視点から. *Psychoanalytic Frontier*, 2, 11-20.
- 野原一徳 (2016). 学生相談室相談員が初めて連携をとるまでの期間と連携の相手. 愛知淑徳大学学生相談室活動報告書, 7, 5-8.
- 野原一徳 (2017). 学生相談で出会う過換気症状とその周辺. 愛知淑徳大学学生相談室活動報告書, 8, 9-13.
- 野原一徳 (2018). 卒業期の女子大学院生における父親像と殻表象. 心理臨床学研究, 36(5), 523-533.
- 野原一徳 (2020a). 学生相談における卒業期の意味: 文献研究. *Psychoanalytic Frontier*, 6, 28-38.
- 野原一徳 (2020b). 卒業期女子学生における親子関係の変容-自立と保護をめぐって-. 学生相談研究, 41(1), 1-11.
- 野原一徳 (2021). 心理的殻とは何か: 比較の試み. *Psychoanalytic Frontier*, 8, 13-22.
- 野原一徳 (投稿予定). 大学生活の終わりににおける心理的自立とまなごしの移動. *Psychoanalytic Frontier*.
- 野村梨世 (2019). 女性のライフサイクルに関する研究の動向と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 59, 381-388.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44(1), 11-22.
- 尾形和男 (2011). 父親の存在意義. 尾形和夫(編著) 父親の心理学. 北大路書房, 32-47.
- Ohtaka, M. & Kamisawa, K. (2019). Perspective-taking in families based on the social relations model. 実験社会心理学研究, 58(2), 111-115.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係. 教育心理学研究, 47(2), 248-258.
- 岡本祐子 (1998). 成人女性のアイデンティティ発達に関する研究の動向と展望. 岡本祐子(研究代表者) 成人女性のアイデンティティ発達過程と危機様態に関する研究一ケ

- ア役割を担うことによるアイデンティティの嬉々と発達. 平成 7, 8, 9 年度文部省化学研究補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書 (課題番号 07610132).
- 岡本百合・吉原正治 (2003). *Bulimia Nervosa* と父親イメージ攻撃的な父親イメージが及ぼす影響－. 心身医学, 43(6), 367-373.
- 桶谷文哲・西村優紀美 (2013). 発達障がいのある大学生への支援: 修学支援から就職支援への展開. 学園の臨床研究, 12, 45-52.
- 奥野光 (2004). 健康さを共有する学生相談－レジリアンスを視点にして. 学生相談研究, 24(3), 227-238.
- 奥野光 (2020). 学生を理解する視点. 新版 学生相談ハンドブック. 学苑社, 45-58.
- 大西将史 (2017). 大学生の就職活動を通じた自己形成: 就職活動による自己成長感尺度とアイデンティティとの関連性の検討. 福井大学教育実践研究, 42, 37-46.
- 大西俊江・津森葉子 (1995). 学生相談にみられる青年期後期の心理的課題と援助. 島根大学教育学部紀要, 29, 39-43.
- 小野寺敦子 (1984). 娘からみた父親の魅力. 心理学研究, 55(5), 289-295.
- 小野寺敦子 (1993). 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究. 心理学研究, 64(2), 147-152.
- 大木秀一・彦聖美 (2013). 研究方法論としての文献レビュー－英米の書籍による検討－. 石川看護雑誌, 10, 7-18.
- 大島聖美 (2013). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差. 発達心理学研究, 24(1), 55-65.
- 大島聖美 (2015). 若者の親に対するイメージの発達過程. 家族心理学研究, 29 (1), 34-50.
- 大塚秀実 (2014). 卒業間際の学生が来談した時の援助のあり方をめぐって. 学生相談研究, 34(3), 236-245.
- 大山泰宏 (1997). 高等教育論から見た学生相談. 京都大学高等教育研究, 3, 46-63.
- 尾崎啓子 (2002). 休学・復学期における連携－2 度の休学を経て卒業に至った学生の事例を通して－. 学生相談研究, 23(1), 43-51.
- Parsons, T. & Bales, R. (1956). *Family: Socialization and Interaction Process*. London: Routledge and Kegan Paul. 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明 (訳) (2001). 家族－核家族と子どもの社会化. 黎明書房.

- Roulet, N. L. (1976). Success neurosis in college seniors. *Journal of the American College Health Association*, 24, 232-234.
- 齋藤憲司 (1999). 学生相談の専門性を定置する視点: 理念研究の外観と4つの大学における経験から. *学生相談研究*, 20(1), 1-22.
- 齋藤憲司 (2020a). 学生相談の現在: 1. 今日的高等教育機関を取り巻く環境. 新版 学生相談ハンドブック. 学苑社, 10-12.
- 齋藤憲司 (2020b). 学生相談の理念と歴史. 新版 学生相談ハンドブック. 学苑社, 25-44.
- 齋藤憲司・道又紀子 (2000). 大学院生の適応状況と心理的課題ー進学経路の多様性と研究室の諸機能に注目してー. *学生相談研究*, 21(1), 1-8.
- 齋藤久美子 (1990). 青年後期と若い成人期ー女性を中心に. 小川捷之・鑪幹八郎・齋藤久美子 (編). *臨床心理学大系 3*. 金子書房, 163-176.
- 酒井計史 (2010). 長時間労働からワークライフバランスへ. 牧野カツコ他 (編著). *国際比較にみる世界の家族と子育て*. ミネルヴァ書房, 60-70.
- 坂田裕子 (2005). 不登校学生が卒業を迎えるまでの心の軌跡ー保護者とのコラボレーションを通してー. *学生相談センター紀要*, 15, 39-52.
- 澤聡一 (2020). 大学生の親子間コミュニケーションと進路選択の自己効力に関する研究: レジリエンスを媒介した影響の検討. *北翔大学教育文化学部研究紀要*, 5, 79-88.
- 澤田英三・岡田猛・光富隆・山口修司・井上弥 (1992). 大学から職場への移行. 山本多喜司・ワップナー, S.(編). *人生移行の発達心理学*. 北大路書房, 205-222.
- 関川紘司 (1996). 卒業期の一男子学生との面接過程ー卒業内定を受け容れるまでー. *学生相談研究*, 17(2), 108-115.
- 関川紘司 (1997). 再度留年した学生との面接過程. *学生相談研究*, 18(2), 76-84.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.
- 下茂郁佳・桂田恵美子 (2015). 娘の父親に対する評価に関する研究. *関西学院大学心理科学研究*, 41, 51-56.
- 下山晴彦・峰松修・保坂亨・松原達哉・林昭仁・齋藤憲司 (1991). 学生相談における心理臨床モデルの研究. *心理臨床学研究*, 9(1), 55-69.
- 総務省 (2022). 令和3年社会生活基本調査.

- Stern, D. (1997). *Unformulated experience: From dissociation to imagination in psychoanalysis*. New Jersey: The Analytic Press. 一丸藤太郎・小松貴弘 (監訳) (2003). 精神分析における未構成の経験: 解離から想像力へ. 誠信書房.
- 杉原保史 (2000). 青年期における内的な仕事: アイデンティティの問い. 小林哲郎・高石恭子・杉原保史 (編著) 大学生がカウンセリングを求めるとき: こころのキャンパスガイド. ミネルヴァ書房, 38-54.
- 杉本英晴 (2008). 大学生における「就職しないこと」イメージの構造と進路未決定: テキストマイニングを用いた検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 55, 77-89
- 杉本英晴 (2012). 大学生の就職に対するイメージの構造. キャリア教育研究 31(1), 15-25
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し. 発達心理学研究, 9 (1), 45-55.
- 杉村和美 (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達. 岡本祐子 (編). 女性の生涯発達とアイデンティティ. 北大路書房, 55-86.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2 年間の変化とその要因. 発達心理学研究, 12(2), 87-98.
- 住沢佳子・福島脩美 (2009). 卒業論文が書けず留年を繰り返す大学生の事例一人型シールの導入効果の検討を通して. カウンセリング研究, 42(1), 88-98.
- 鈴木健一・杉岡正典・堀田亮・織田万美子・山内星子・林潤一郎 (2019). 2018 年度学生相談期間に関する調査報告. 学生相談研究, 39(3), 215-258.
- 高石恭子 (2020). 学生相談における見立て. 新版 学生相談ハンドブック. 学苑社, 60-74.
- 高石恭子・岩田淳子 (編著) (2012). 学生相談と発達障害. 学苑社.
- 高橋彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究, 17(2), 208-219
- 田名場美雪 (2011). 卒業後の相談事例の検討. 弘前大学保健管理概要, 32, 5-14.
- 田中慶子 (2014). 未婚者のサポート・ネットワークと自立. 岩上真珠 (編著). 〈若者と親〉の社会学. 青弓社, 65-82.
- 田中崇恵 (2019). 学生相談における卒業の治療的意味: 大学から「生まれ出る」ことをめ



- ぐって. 心理臨床学研究, 37(2), 144-154.
- Target, M. & Fonagy, P. (2002). Fathers in modern psychoanalysis and in society. Trowell, J. & Etchegoyen, A. (Eds.) *The importance of fathers: A psychoanalytic re-evaluation*. Brunner-Routledge. London and New York, 45-66.
- 鎌幹八郎 (1983). ライフサイクルにおける男と女. 飯田真 (他編). 精神の科学 6 ライフサイクル. 岩波書店, 285-308.
- 登張真稲 (2000). 多次元視点に基づく共感性研究の展望. 性格心理学研究, 9(1), 36-51.
- 戸田弘二・牧野高壮・菅原英治 (2002). 青年期後期の家族関係と精神的健康及び精神的・身体的不適応との関連. 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 3, 221-233.
- 豊田洋子 (2010). 卒業期の相談と対応 3 進路. 鶴田和美・桐山雅子 (編). 事例から学ぶ学生相談. 北大路書房, 72-86.
- 都留春夫 (1994). 学生相談の理念. 小谷英文・平木典子・村山正治 (編). 学生相談—理念・実践・理論化—. 星和書店, 3-17.
- 鶴田和美 (1994a). 大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味. 心理臨床学研究, 12(2), 97-108.
- 鶴田和美 (1994b). 卒業期来談学生についての文献的研究. 名古屋大学学生相談室紀要, 6, 3-15.
- 鶴田和美 (1995a). 学生相談における時間の意味. 心理臨床学研究, 12(4), 294-307.
- 鶴田和美 (1995b). 卒業期来談学生の面接過程. 名古屋大学学生相談室紀要, 7, 3-16.
- 鶴田和美 (1998). 学生相談. 下山晴彦 (編). 教育心理学II. 東京大学出版会, 237-257.
- 鶴田和美 (2001a). 学生生活サイクルとは. 鶴田和美 (編). 学生のための心理相談. 培風館, 2-11.
- 鶴田和美 (2001b). 卒業期の特徴. 鶴田和美 (編). 学生のための心理相談. 培風館, 33-41.
- 鶴田和美 (2001c). 大学教育を支える学生相談. 鶴田和美 (編). 学生のための心理相談. 培風館, 241-245.

- 鶴田和美 (2002). 大学生とアイデンティティ形成の問題. 臨床心理学, 2(6), 725-730.
- 鶴田和美 (2003). 学生相談における学生生活サイクル研究の位置づけと課題. 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 3, 16-24.
- 上田琢哉 (2014). 卒業論文制作が学生の心理的発達に果たす役割－学生相談事例によるモデル化の試み－. 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 63, 145-153.
- 牛島定信・福井敏 (1980). 対象関係からみた最近の青年病理. 小此木啓吾 (編). 青年の精神病理 2. 弘文堂, 87-114.
- Wallerstein, R.S. (1998). Erikson's concept of ego identity reconsidered. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 46, 229-247.
- 渡部未沙 (2000). 卒業期に過食嘔吐を見つめ直した女子学生. 学生相談研究, 21(2), 152-150.
- 渡部未沙 (2003). 物語る場としての学生相談室－思春期後に語られる『思春期』－. 学生相談研究, 24(2), 148-157.
- 渡部未沙 (2005). 学生相談における中断と終結をめぐる一考察－中断を挟んだ入学期と卒業期の事例から－. 学生相談研究, 26(2), 93-102.
- Winnicott, D. W. (1965). *The maturational processes and the facilitating environment*. London: Hogarth Press. 牛島定信 (訳) (1977). 情緒発達 of 精神分析理論. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D. W. (1971). *Playing and reality*. London: Tavistock. 橋本雅雄・大矢泰士 (訳) (2015). 改訳 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.
- 山田裕子 (2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連. 青年心理学研究, 23(1), 1-18.
- 山田裕子・宮下一博 (2007). 青年の自立と適応に関する研究: これまでの流れと今後の展望. 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 7-12.
- 山崖俊子 (2007). 育ちの支援としての学生相談. 学生相談研究, 27(3), 179-190.
- 山口亜希子 (2002). アルコール依存・摂食障害を呈した女子学生の卒業までの援助. 学生相談研究, 23(2), 137-146.
- 山口智子 (2001). 学生相談における時間的・空間的特性を活かした関わりの工夫－卒業期の傷つき体験の語りと自己の修復－. 学生相談研究, 22(1), 44-52.
- 山本彩留子・岡本祐子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人

態度の関連性. 広島大学心理学研究, 8, 107-120.

山本佳子・仁平義明 (2009). 統合失調症の大学生に対する卒業をゴールとしない支援  
ー学生相談のもう一つの方向ー. 学生相談研究, 30(1), 12-22.

安田道子・鈴木健一 (編著) (2016). 大学生活の適応が気になる学生を支える (心の発達支援シリーズ 6). 明石書店.

安福純子 (1994). 頭の中の声で悩む男子学生の事例. 大阪教育大学紀要IV教育科学,  
42(2), 377-386.

吉武清實 (2018). 大学における学生相談の現状と課題ー学生相談機関の整備・充実  
化の視点からー. 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 4, 19-28.